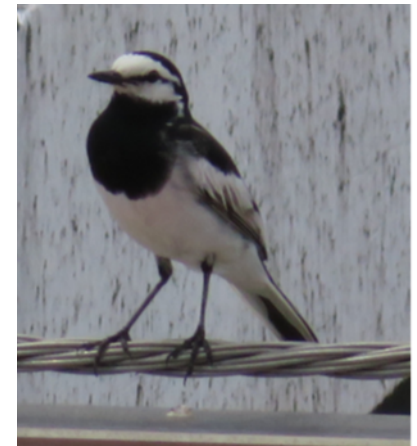


意見と質問



2021年8月28日
丸地 三郎



年代観

- 弥生時代・古墳時代の年代観の違いは大きい。
 - 歴博関係者は、弥生時代の開始時期は、BC1000頃から
 - 寺沢薫氏は、紀元前3世紀から(BC200数十年)
 - 歴博に近づける学者達も居る。
- 弥生時代の開始時期は、寺沢薫氏と同じ時期と考えているので、寺沢薫氏の年代観を採用する。

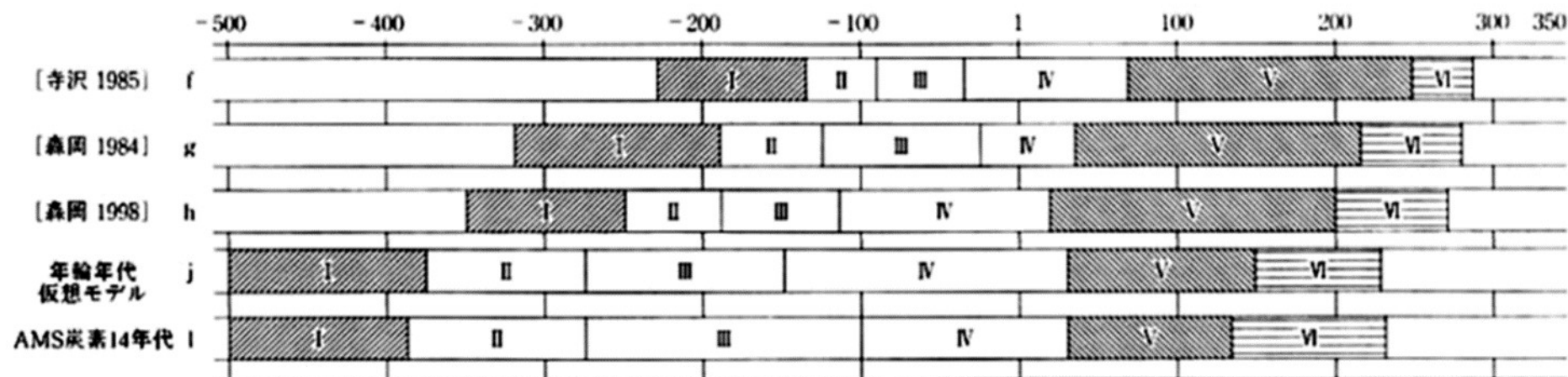
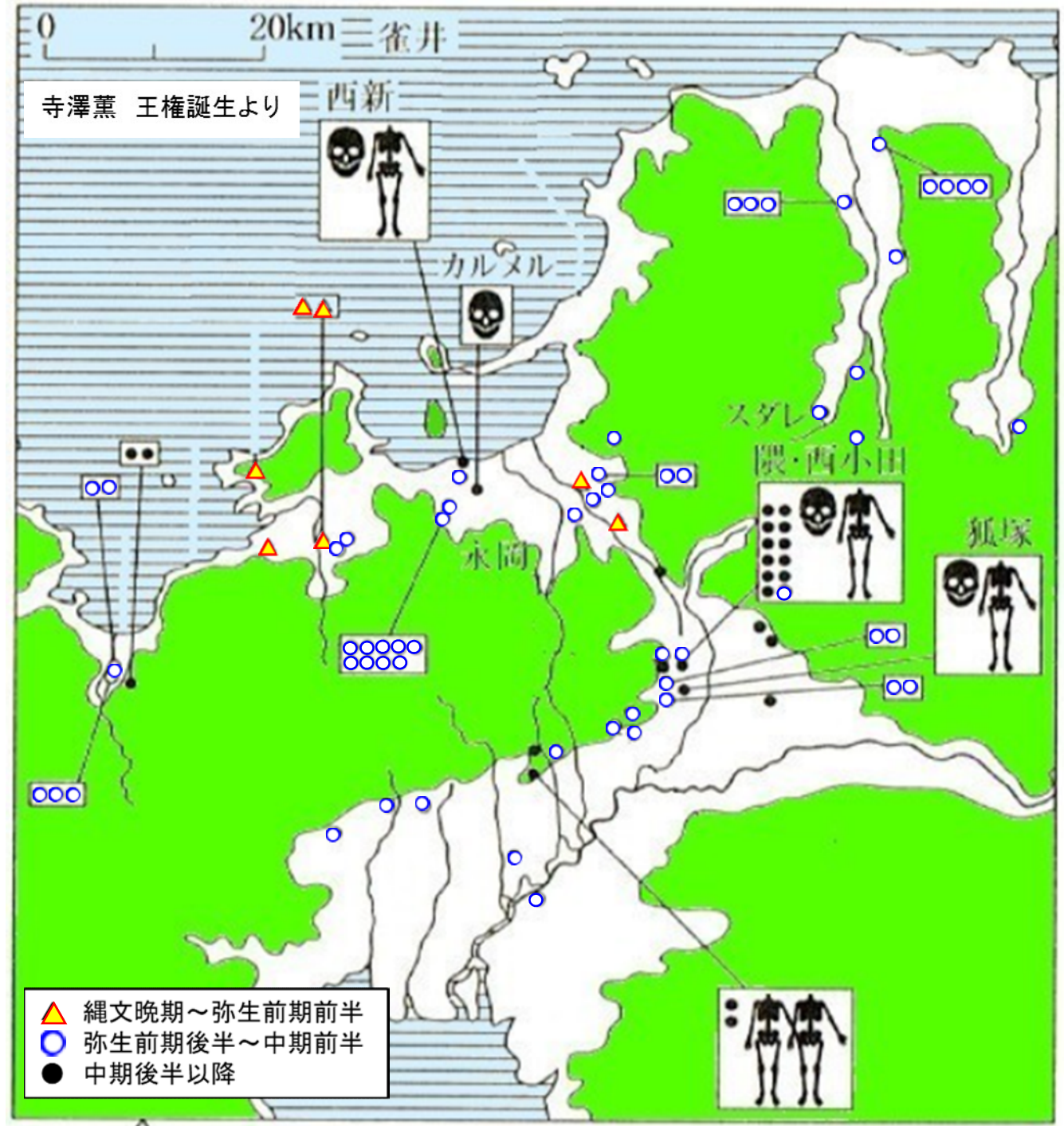


表1 弥生時代年代表諸説の推移 [森岡 2003原図一部改変]

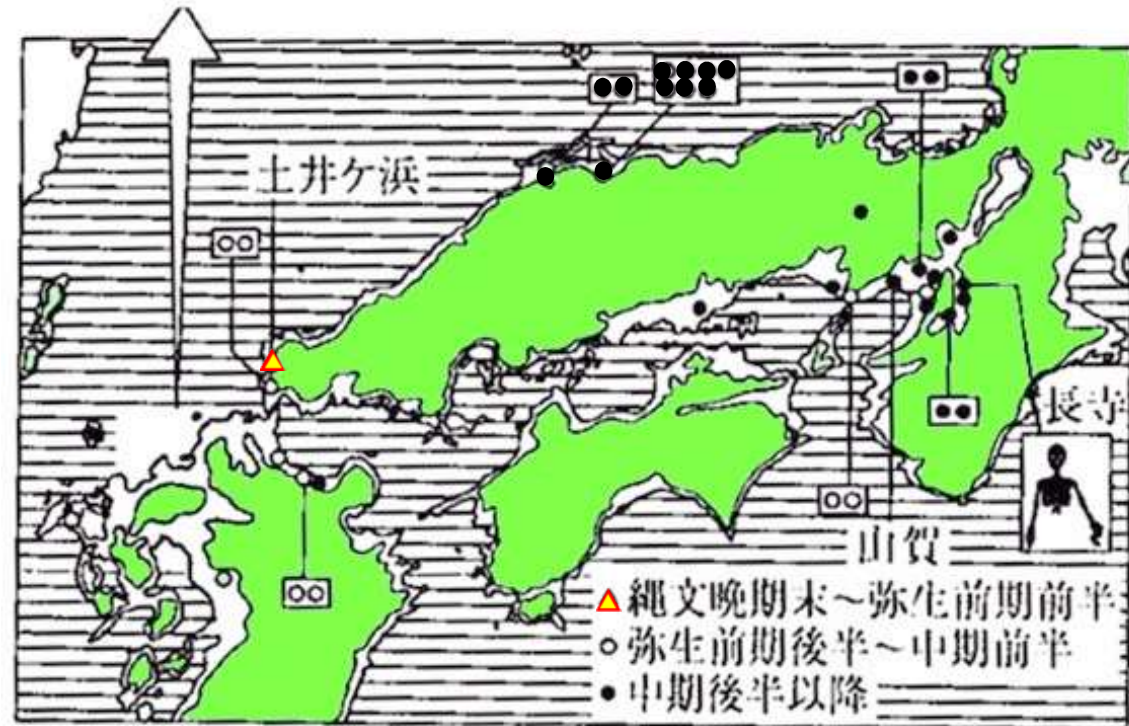
戦争遺跡

寺 沢 案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500— 前5世紀	縄文	晩期後半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式 (口酒井)	山ノ寺式 (曲り田式)
400— 前4世紀			船橋式	夜臼式
300— 前3世紀			長原式	板付Ⅰ式
200— 前2世紀			第Ⅰ様式	板付Ⅱ式
100— 前1世紀	弥生	前期	第Ⅱ様式	城ノ越式
B. C.			第Ⅲ様式	須玖式
A. D.			第Ⅳ様式	高三瀧式
1世紀			第Ⅴ様式	下大隅式
100— 2世紀	古墳	後期	第Ⅵ様式	西新式
200— 3世紀			庄内式	Ia
300— 4世紀			布留式	Ib
400—				IIa
				IIb
				IIIa
			(須恵器)	



戦争遺跡

寺 沢 案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500— 前5世紀	縄文	晩期後半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式 (口酒井)	山ノ寺式 (曲り田式)
400— 前4世紀			船橋式	夜臼式
300— 前3世紀			長原式	板付Ⅰ式
200— 前2世紀			第Ⅰ様式	板付Ⅱ式
100— 前1世紀	弥生	前期	第Ⅱ様式	城ノ越式
B. C.			第Ⅲ様式	須玖式
A. D.			第Ⅳ様式	高三瀧式
1世紀			第Ⅴ様式	下大隅式
200— 2世紀	古墳	後期	第Ⅵ様式	西新式
300— 3世紀			庄内式	Ia
400— 4世紀			布留式	Ib
				IIa
				IIb
				IIIa
			(須恵器)	

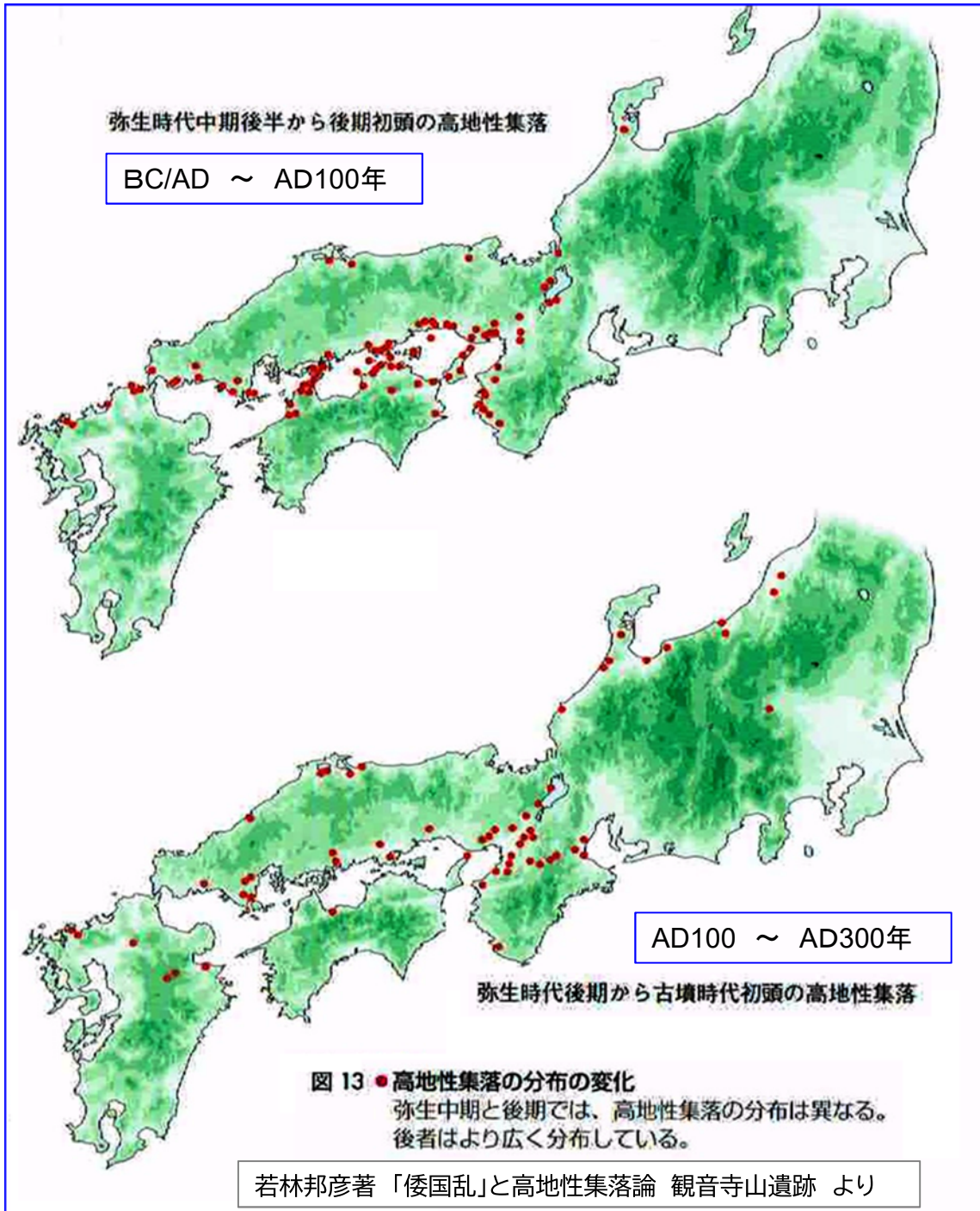


戦争犠牲者の分布 縄文晩期末から弥生中期後半。△、○、●は全身を、絵に示したものはその部分を発掘（『倭国乱る』国立歴史民俗博物館編〔朝日新聞社、1996年〕を参考）

寺澤薫著「王権誕生」より 土井ガ浜と青谷上寺地などは丸地が時期を変更

高地性集落

寺 沢 案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500— 前5世紀	縄 文	晩 期 後 半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式 (口酒井)	山ノ寺式 (曲り田式) 1
400— 前4世紀			船橋式	夜臼式 2
300— 前3世紀			長原式	板付Ⅰ式 1 2
200— 前2世紀			1 2 3 4 第Ⅰ様式	板付Ⅱ式 1 2 3
100— 前1世紀 B. C.	弥 生	中 期	第Ⅱ様式 1 2 3	城ノ越式 1
A. D.			第Ⅲ様式 1 2	須玖式 2 3 4 5
1世紀			第Ⅳ様式 1 2 3 4	
100— 2世紀			第Ⅴ様式 0 1 2 3	高三瀧式 1 2
200— 3世紀	古 墳	(初 頭) 前 期	第Ⅵ様式 1 2 3 4	下大隅式 3 4
300— 4世紀			庄内式 0 1 2 3	西新式 5
400—			布留式 0 1 2 3 4	Ia Ib IIa IIb IIIa (土師器)
			(須恵器)	



青銅祭器

寺 沢 案					
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年	
500 —	縄文	晩期後半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式	山ノ寺式 (曲り田式)	
前5世紀			(口酒井)	1	
400 —			船 橋 式	夜臼式	
前4世紀				2	
300 —		弥生	前期	長 原 式	板付Ⅰ式
前3世紀					1 2
200 —				第Ⅰ様式	板付Ⅱ式
前2世紀					1 2 3
100 —			中期	第Ⅱ様式	城ノ越式
前1世紀					1 2 3
B. C.				第Ⅲ様式	須玖式
A. D.					1 2 3 4
	第Ⅳ様式				
1世紀	後期			第Ⅴ様式	高三瀧式
100 —				0 1 2 3	
2世紀					
200 —		第Ⅵ様式	下大隅式		
			1 2		
3世紀		(初頭)前期	庄内式	西新式	
300 —			0 1 2 3		
4世紀	布留式		Ⅰa Ⅰb Ⅱa Ⅱb Ⅲa		
400 —			0 1 2 3 4		
			(須 恵 器)		

BC300~175

BC175~100

BC100~75

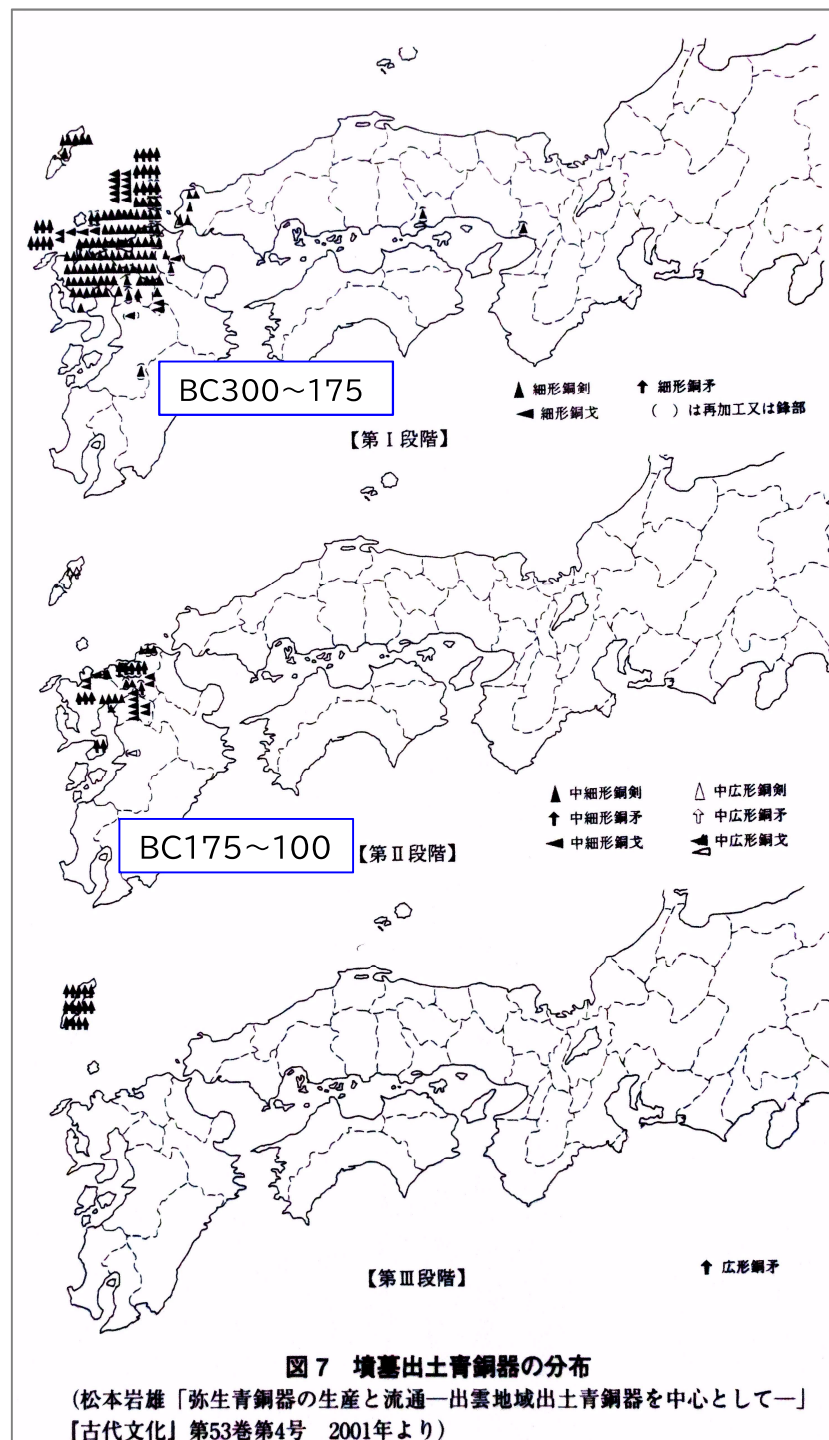
BC75~AD50

AD50 ~ 150

	弥生時代前期 (Ⅰ期)	(Ⅱ期)	弥生時代中期 (Ⅲ期)	(Ⅳ期)	弥生時代後期 (Ⅴ期)
銅矛	 銅矛Ⅰ式(福岡・田端)	 銅矛Ⅱ式(佐賀・久里)	 銅矛Ⅲa類(島根・神庭荒神谷)	 銅矛Ⅳb類(島根・神庭荒神谷)	 銅矛Ⅴ形(長崎・クビル)
銅剣	 銅剣Ⅰ式(福岡・田端)	 銅剣Ⅱa類(高知・波介)	 銅剣Ⅱb類(大分・浜)	 銅剣Ⅲ式(香川・瓦谷)	 銅剣Ⅳa類(島根・神庭荒神谷)
銅鐙	 銅鐙Ⅰ式(島根・神庭荒神谷)	 銅鐙Ⅱ式(島根・加茂岩倉)	 銅鐙Ⅲ式(島根・加茂岩倉)	 銅鐙ⅣⅠ式(島根・飯屋)	 銅鐙ⅣⅢ式(和歌山・桑谷)

副葬された青銅器

寺 沢 案							
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年			
500 —	縄文	晩期後半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式	山ノ寺式 (曲り田式)			
前5世紀			(口酒井)	1			
400 —			船 橋 式	夜臼式			
前4世紀				2			
300 —		弥生	前期	長 原 式	板付Ⅰ式 1 2		
前3世紀				第Ⅰ様式 1 2 3 4	板付Ⅱ式	1 2 3	
200 —					第Ⅱ様式 1 2 3	城ノ越式	1
前2世紀						第Ⅲ様式 1 2	
100 —			中期		第Ⅳ様式 1 2 3 4		須玖式
前1世紀				第Ⅴ様式 0 1 2 3		高三瀦式	
B. C.					第Ⅵ様式 1 2		下大隅式
A. D.				後期		庄内式 0 1 2 3	
1世紀	布留式 0 1 2 3 4		(土師器)		Ia Ib		
100 —					古墳	(初頭)前期	Ⅱa Ⅱb Ⅲa
2世紀	須恵器						
200 —							
3世紀							
300 —							
4世紀							
400 —							



第一段階 武器型祭器・銅鐸の分布

初期出雲国の範囲

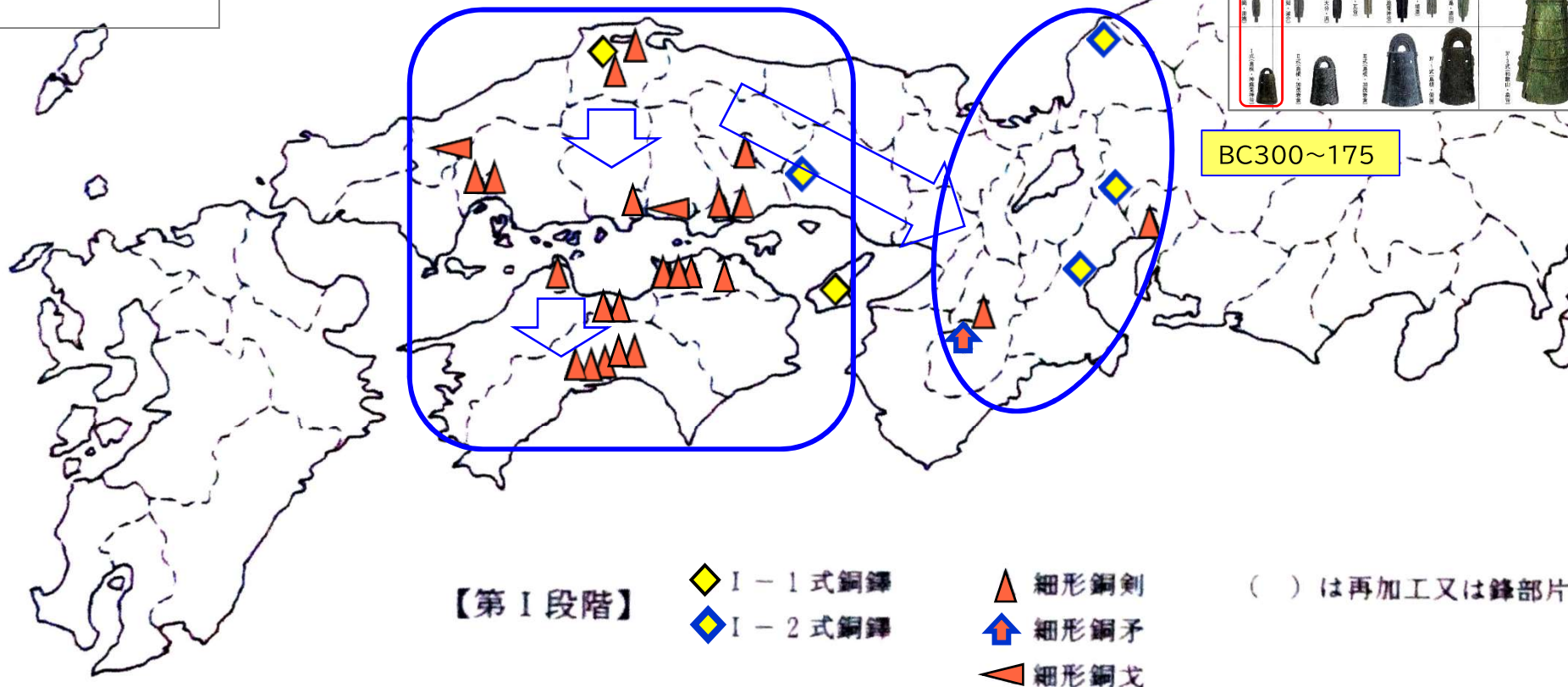
埋納された
青銅器の分布

出雲の考古学と『出雲の風土記』に収納
松本岩雄著 3章「出雲の青銅器」より

原典は著者の下記の論文
松本岩雄「弥生青銅器の生産と流通—出雲地域出土青銅器を中心として—」古代文化 第53巻第4号
2001年 より



BC300~175



- 第一段階：出雲族を代表する青銅製武器型祭器と銅鐸は出雲地方で始まる。
- 武器型祭器は、中国山地を越えて瀬戸内海沿岸、高知まで広がる。
 - 中国山地は、人の交流を妨げるほど険しい山地では無く、川沿いに河岸段丘を持った谷があり、通行可能。
- 瀬戸内海を制圧することで、近畿地方に拠点を確保し、津と愛知にも広げた。
- 一方日本海側では、出雲から一足飛びに福井県で出土し、北陸への拠点としたと想定。

第2段階① 武器型祭器・銅鐸の分布

出雲国拡大経過

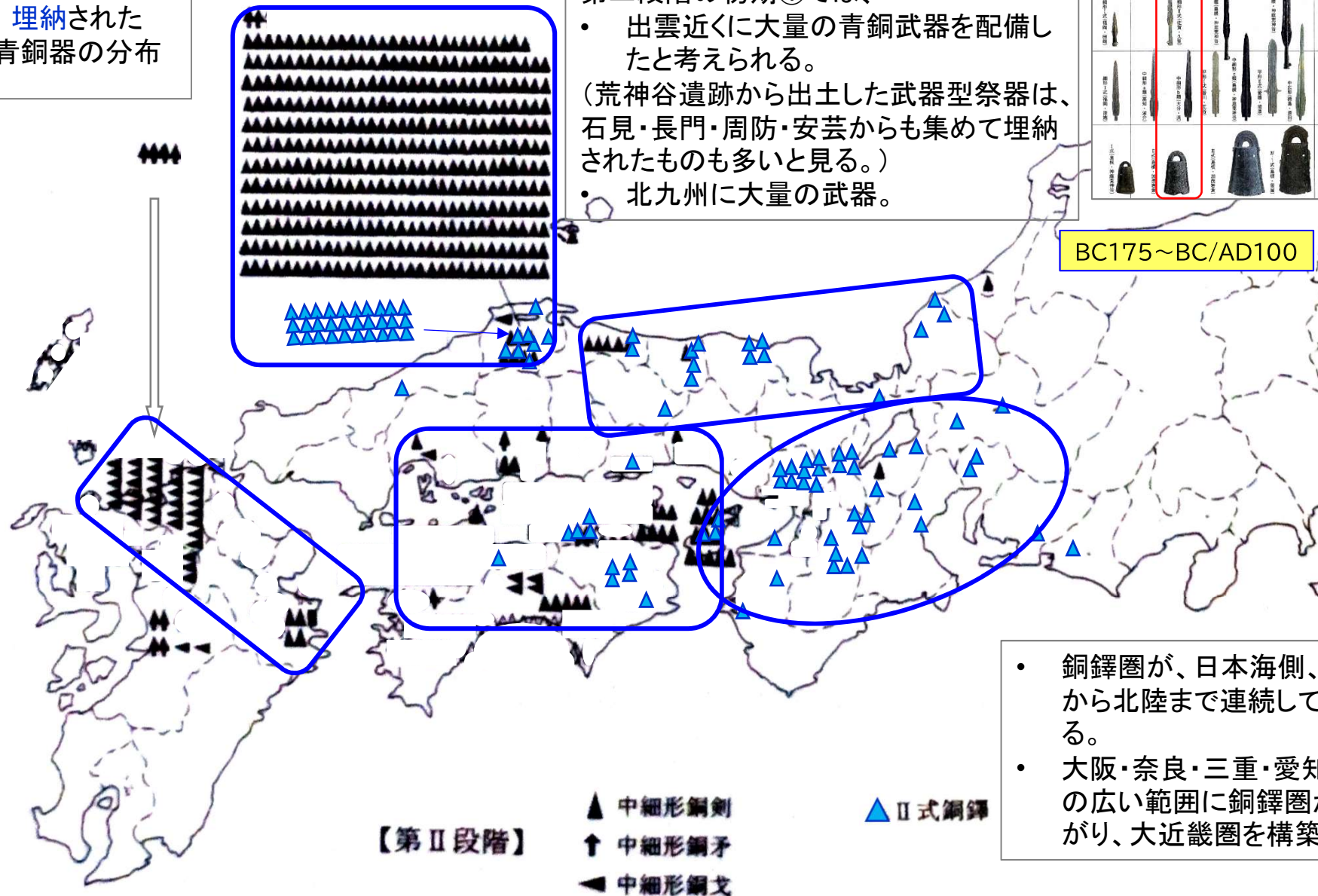
埋納された
青銅器の分布

第二段階の初期①では、

- 出雲近くに大量の青銅武器を配備したと考えられる。
(荒神谷遺跡から出土した武器型祭器は、石見・長門・周防・安芸からも集めて埋納されたものも多いと見る。)
- 北九州に大量の武器。



BC175~BC/AD100



- 銅鐸圈が、日本海側、出雲から北陸まで連続して広がる。
- 大阪・奈良・三重・愛知までの広い範囲に銅鐸圈が広がり、大近畿圏を構築。

第2段階② 武器型祭器・銅鐸の分布

出雲国拡大経過

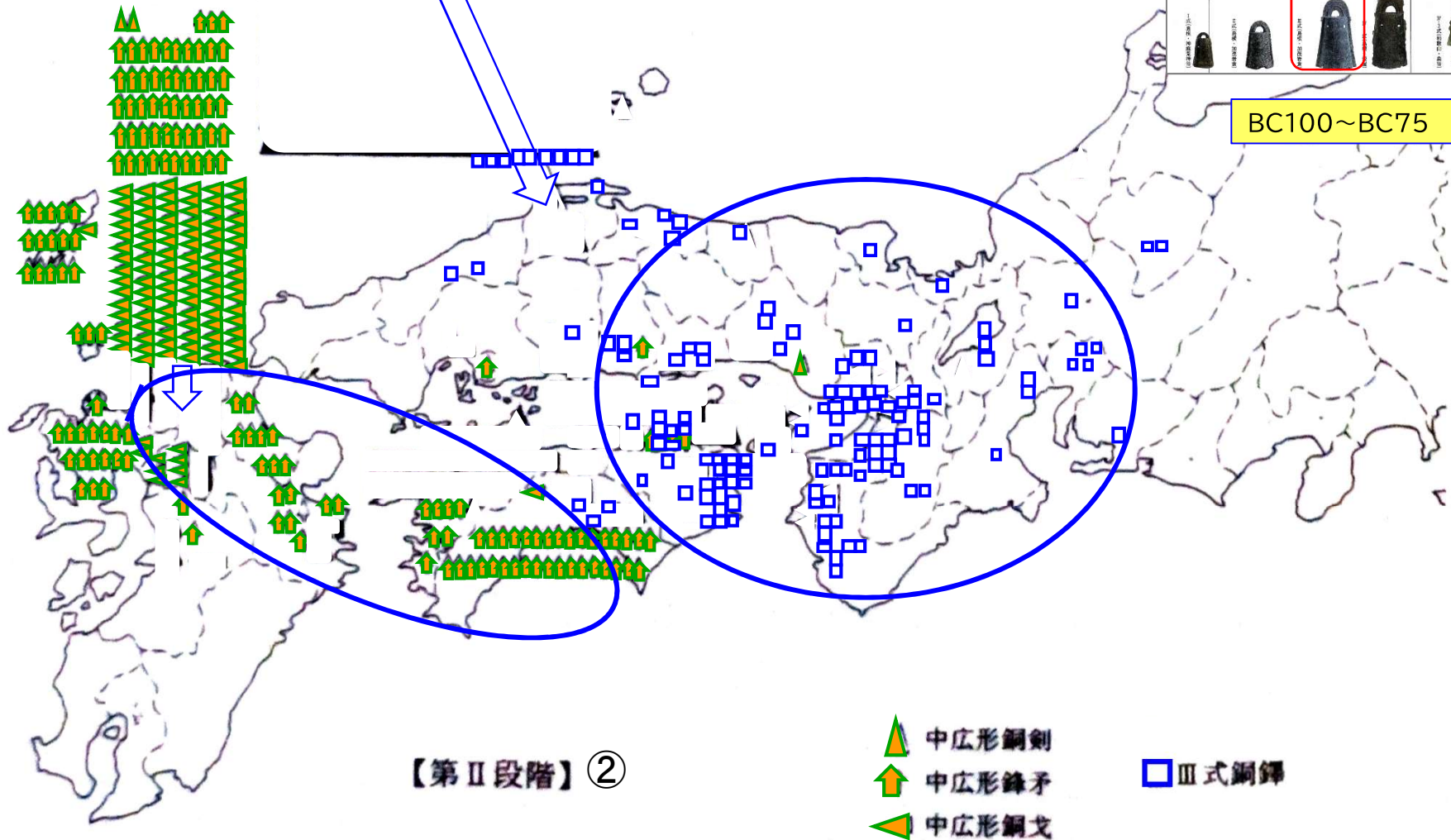
埋納された
青銅器の分布

第二段階②では、

- ・ 北九州には大量の青銅武器。
- ・ 銅鐸圏の近畿圏は、瀬戸内海沿岸に拡大。



BC100~BC75



第2段階③ 武器型祭器の分布

出雲国拡大経過

埋納された
青銅器の分布

第2段階③では、

- 大量の青銅製武器が、瀬戸内海と大阪湾沿いに集中して広がる。

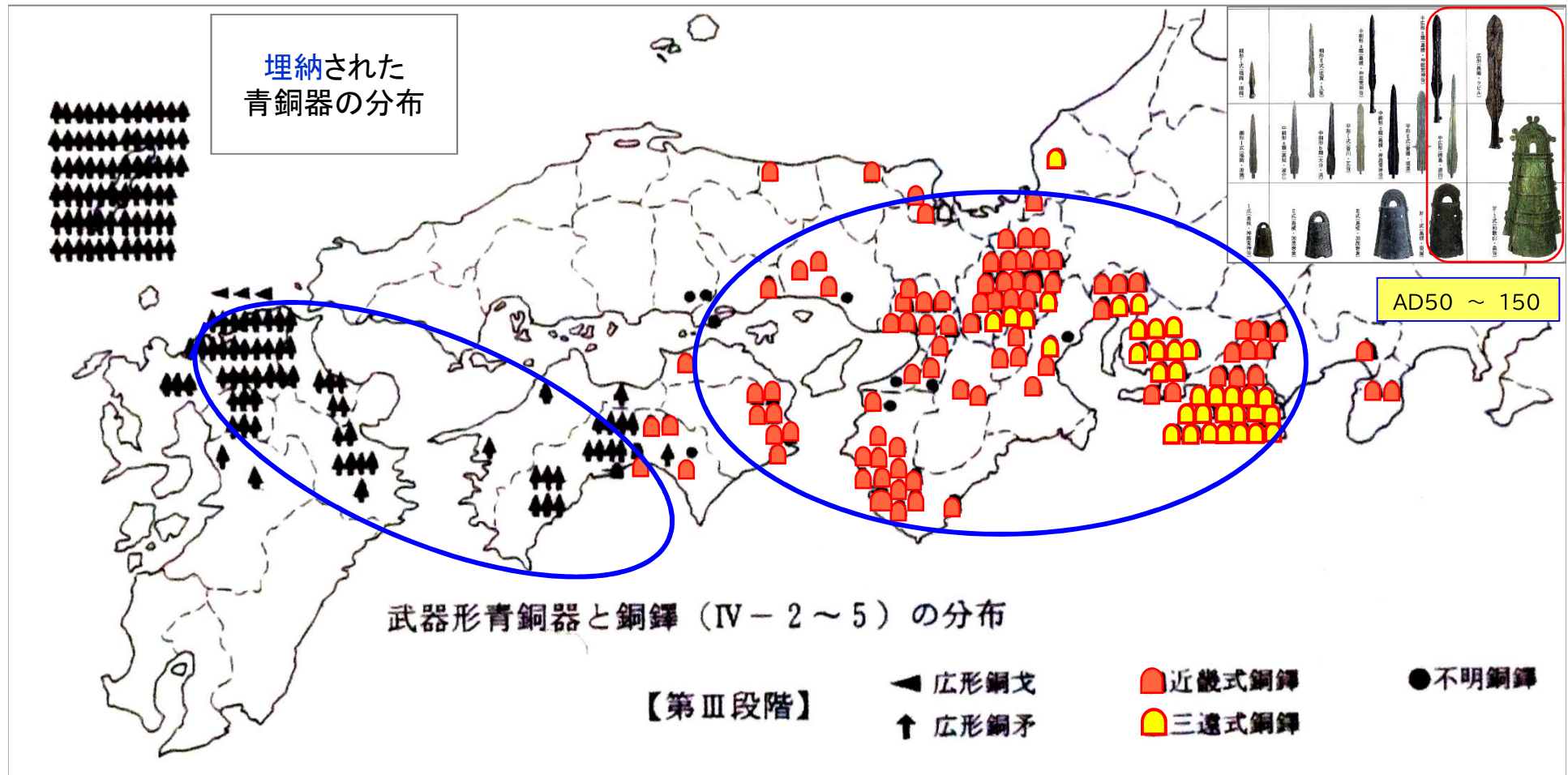


BC75~AD50



第3段階 武器型祭器・銅鐸の分布

出雲国拡大経過



- 第3段階では、
 - 北九州・大分・高知に青銅製武器が広がる。
 - 一方、銅鐸は、近畿型・三遠型と大きく煌びやかになり、大和の周辺地域に大量に存在した。
 - この時期が、出雲族の領地・支配地が最も広がった時期
 - 畿内から滋賀・愛知・東海に広がる銅鐸を祭る地域の増大に注目する。

青銅器 歴博・春成秀爾氏の年代

寺 沢 案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500	縄文	晩期後半 (突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式	山ノ寺式 (曲り田式)
前5世紀			(口酒井)	1
400			船橋式	夜臼式
前4世紀			長原式	板付Ⅰ式
300	弥生	前期	1	1
前3世紀			2	2
200			3	3
前2世紀			4	3
100		中期	第Ⅰ様式	城ノ越式
前1世紀			1	1
B.C.			2	2
A.D.			3	3
1世紀			4	4
100		後期	第Ⅱ様式	高三瀧式
2世紀			1	1
200			2	2
3世紀			3	3
300	古墳	(初頭前期)	第Ⅲ様式	下大隅式
4世紀			1	1
400			2	2
			3	3
			4	4
			5	5
			6	6
			7	7
			8	8
			9	9
			10	10
			11	11
			12	12
			13	13
			14	14
			15	15
			16	16
			17	17
			18	18
			19	19
			20	20
			21	21
			22	22
			23	23
			24	24
			25	25
			26	26
			27	27
			28	28
			29	29
			30	30
			31	31
			32	32
			33	33
			34	34
			35	35
			36	36
			37	37
			38	38
			39	39
			40	40
			41	41
			42	42
			43	43
			44	44
			45	45
			46	46
			47	47
			48	48
			49	49
			50	50
			51	51
			52	52
			53	53
			54	54
			55	55
			56	56
			57	57
			58	58
			59	59
			60	60
			61	61
			62	62
			63	63
			64	64
			65	65
			66	66
			67	67
			68	68
			69	69
			70	70
			71	71
			72	72
			73	73
			74	74
			75	75
			76	76
			77	77
			78	78
			79	79
			80	80
			81	81
			82	82
			83	83
			84	84
			85	85
			86	86
			87	87
			88	88
			89	89
			90	90
			91	91
			92	92
			93	93
			94	94
			95	95
			96	96
			97	97
			98	98
			99	99
			100	100
			101	101
			102	102
			103	103
			104	104
			105	105
			106	106
			107	107
			108	108
			109	109
			110	110
			111	111
			112	112
			113	113
			114	114
			115	115
			116	116
			117	117
			118	118
			119	119
			120	120
			121	121
			122	122
			123	123
			124	124
			125	125
			126	126
			127	127
			128	128
			129	129
			130	130
			131	131
			132	132
			133	133
			134	134
			135	135
			136	136
			137	137
			138	138
			139	139
			140	140
			141	141
			142	142
			143	143
			144	144
			145	145
			146	146
			147	147
			148	148
			149	149
			150	150
			151	151
			152	152
			153	153
			154	154
			155	155
			156	156
			157	157
			158	158
			159	159
			160	160
			161	161
			162	162
			163	163
			164	164
			165	165
			166	166
			167	167
			168	168
			169	169
			170	170
			171	171
			172	172
			173	173
			174	174
			175	175
			176	176
			177	177
			178	178
			179	179
			180	180
			181	181
			182	182
			183	183
			184	184
			185	185
			186	186
			187	187
			188	188
			189	189
			190	190
			191	191
			192	192
			193	193
			194	194
			195	195
			196	196
			197	197
			198	198
			199	199
			200	200
			201	201
			202	202
			203	203
			204	204
			205	205
			206	206
			207	207
			208	208
			209	209
			210	210
			211	211
			212	212
			213	213
			214	214
			215	215
			216	216
			217	217
			218	218
			219	219
			220	220
			221	221
			222	222
			223	223
			224	224
			225	225
			226	226
			227	227
			228	228
			229	229
			230	230
			231	231
			232	232
			233	233
			234	234
			235	235
			236	236
			237	237
			238	238
			239	239
			240	240
			241	241
			242	242
			243	243
			244	244
			245	245
			246	246
			247	247
			248	248
			249	249
			250	250
			251	251
			252	252
			253	253
			254	254
			255	255
			256	256
			257	257
			258	258
			259	259
			260	260
			261	261
			262	262
			263	263
			264	264
			265	265
			266	266
			267	267
			268	268
			269	269
			270	270
			271	271
			272	272
			273	273
			274	2

神武東征の出発地 宮崎説

➤ 出発地(日向)はどこか？

・ 従来の一般的な解釈は、宮崎県

・ 疑問点が多い

1. 日向の地名は、『日本書紀』に、景行天皇と日本武尊の征西説話で、「日向国」と名づけたと記述されている。それ以前は日向では無いはず。津田左右吉氏の言う熊襲の地で、宮崎県は日向では無い。
2. 弥生時代の遺物に、青銅器・鉄器など有力な部族が存在した証拠となるものが無い。
 - ・ 鉄器の出土 → 無し
 - ・ 鋌 → 戦争用の大型鋌無し
 - ・ 弥生遺物 石包丁のみ（縄文時代からも石包丁は出土する(陸稲用)）
3. 宮崎県の有名な神社（鵜戸神宮 宮崎神宮 天岩戸神社 など）は、
 - ・ 平安時代の神社を記した延喜式に、記述が無く、創建時期は新しい。
 - ・ 高千穂神社は、延喜式にあるが、式外社で、格が低い。
4. 大和朝廷を示す、三種の神器は、出土しない。

・ 根拠

1. 古事記に記されるスタート直後の到達地は、宇佐で、順路に矛盾が少ない。

➤ 当時の宮崎県は、

- ・ 弥生人の住む地域ではなく、先住民：縄文人の住む処で、遺跡も縄文時代と変わらないものが出土する。
- ・ 石包丁は、稲の穂を刈る米作の象徴のような遺物である。この石包丁が、宮崎の博物館の弥生時代の代表的な出土物。
 - ・ 石包丁は、縄文時代から陸稲でも使われて来たもの。
- ・ 弥生時代の先端的な金属器などは出土しないことは、弥生人の住むところではない。
- ・ 大和朝廷が出来上がっても、抵抗した熊襲の住む土地が宮崎県で
神武達・弥生人は、宮崎に住むことは、有り得ない。

➤ 古事記ある「此地は韓国に向かい、(中略)、朝日の直刺す国、夕日の日照る国」では、地形的に無い。朝日はさすが。

神武東征の出発地

日向：糸島説

- 出発地(日向)はどこか？
 - 糸島・前原地区が唯一の候補
 - 適合する要件
 - 古事記ある「此地は韓国に向かい、(中略)、朝日の直刺す国、夕日の日照る国」である。
 - 日本書記の「筑紫の日向の高千穂の櫛触峯」に適合する。
 - 神話に所縁の神社が多数存在。志登神社、細石神社、高祖神社、天降神社などなど。しかも古い。
 - 弥生時代の最先端金属器の遺物が多数出土。青銅器、鉄器、大型鍬、鏡など
 - 三種の神器が出土
 - 適合しない要件
 - 古事記に記されるスタート直後の到達地は、宇佐は、順路に矛盾がある。
 - 日本書記に記されるルート：日向→速吸之門→宇佐→筑紫の岡水門→安芸 ここにも矛盾がある
 - 古事記・日本書記は記された時代に、九州の古事や地理に関する正確な情報が失われていたのでは無いと思われる。 → 後述
 - 更に適合する要件・条件
 - 弥生時代を導いたと証拠付ける遺跡数(遺跡数の図参照)
 - 近隣地域の戦乱の遺跡
 - 王墓が存在し、しかも、立派な三種の神器が出土。
 - 次代王墓がこの付近から出土しない。(主力の東征・東遷の証拠)

前原・平原地域の文化レベル

・平原王墓

- ・ 弥生時代後期・古墳時代直前の時代に
- ・ 三種の神器が揃い
- ・ 飛びぬけて、充実した副葬品が出土。
- ・ 日本最大の大型銅鏡 5枚は、圧巻。

・三雲南小路王墓・井原鍵溝王墓

- ・ 平原王墓に先行する王墓
- ・ 三種の神器や充実した副葬品

・隣の早良地区の吉武高木・桶渡遺跡

- ・ 前期末～中期前半にかけて他を圧倒
- ・ 中期後半は、須玖岡本遺跡や平原地区に次ぐ規模に

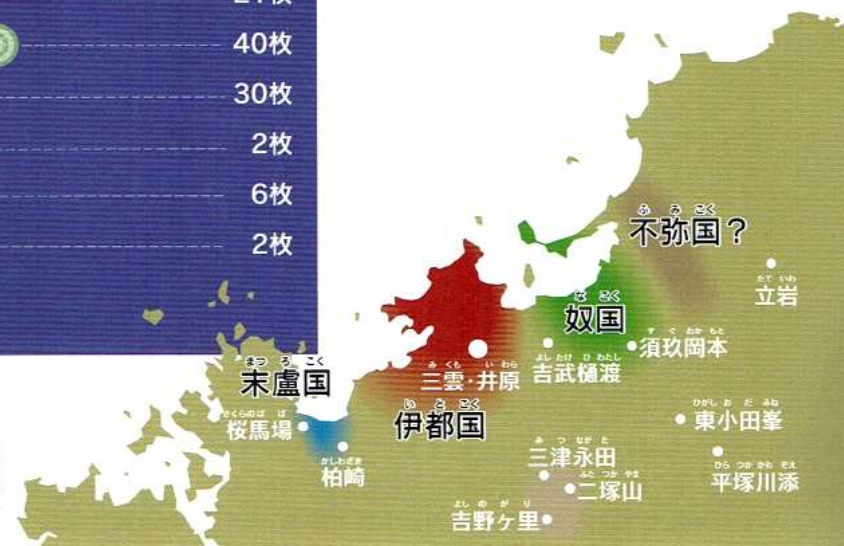


30-1 銅鏡の大きさの比較



23-1 銅鏡の出土枚数比較図

三雲南小路王墓では1号、2号墓棺合せて57枚に上る大量の銅鏡が出土した。これほどの鏡の大量副葬は弥生時代はもとより、古墳時代に入ってから突出しており、ほとんど例がない。



吉武高木遺跡

可児俊信さんへの質問

- 神武東征の行われた時期は、何時でしょうか？
- 饒速日と神武達との関係は？
 - 同族？
 - 敵対関係？
- 戦争遺跡
 - 戦傷遺跡・高地性集落についてのご意見を聞かせて下さい。
- 戦傷遺跡・高地性集落についてのご意見は？
- 青銅器製祭器についてのご意見は？

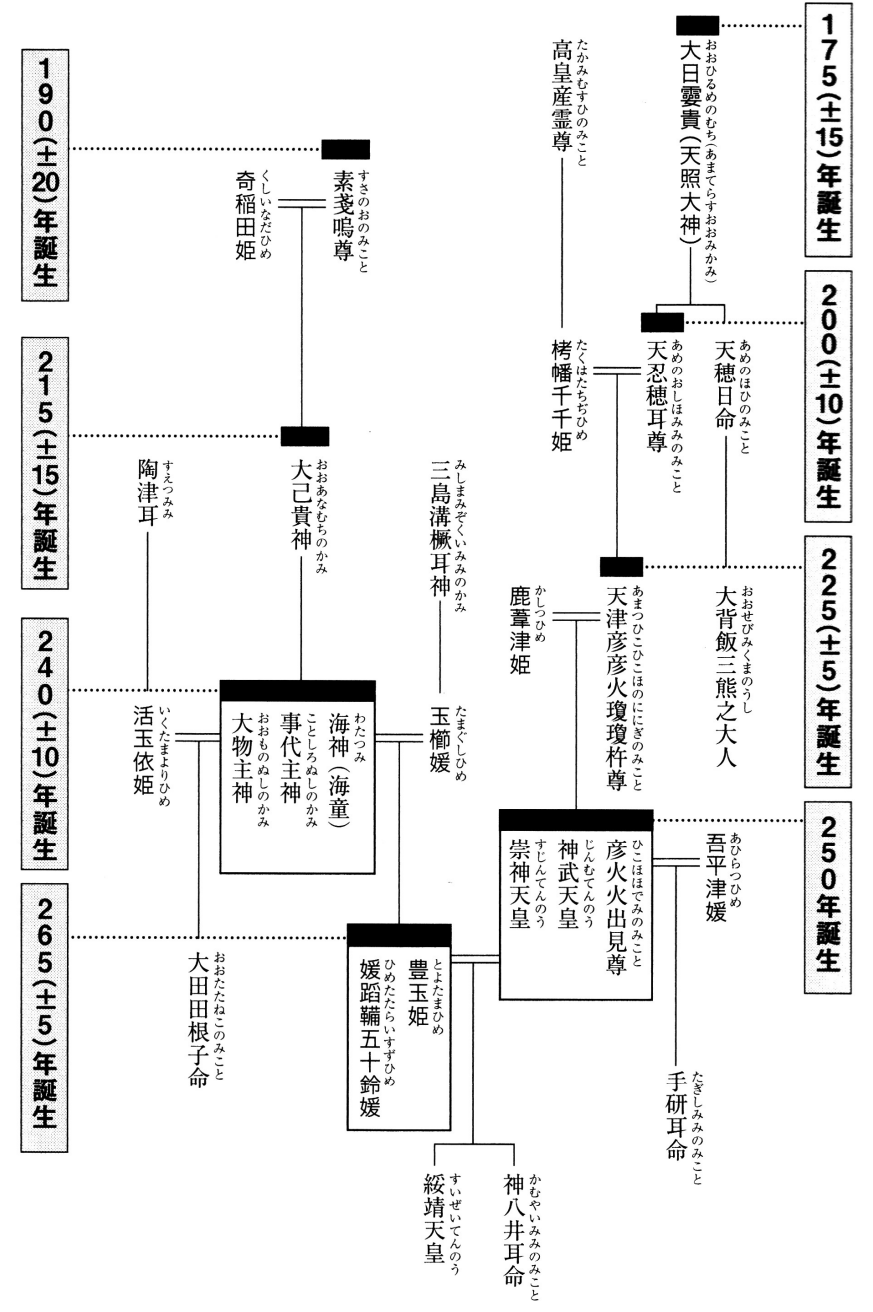
伊藤雅文氏の年代

寺 沢 案				
実年代	時代	時期	近畿編年	北九州編年
500 —	縄文	晩期後半(突帯文土器)	滋賀里Ⅳ式 (口酒井) 船橋式	山ノ寺式 (曲り田式)
前5世紀				1
400 —				2
前4世紀				2
300 —	弥生	前期	長原式	板付Ⅰ式
前3世紀				1
200 —				2
前2世紀				3
100 —		中期	第Ⅰ様式	板付Ⅱ式
前1世紀				1
B. C.				2
A. D.				3
1世紀				4
100 —		後期	第Ⅱ様式	城ノ越式
2世紀				1
200 —				2
3世紀				3
300 —	古墳	(初頭)前期	第Ⅲ様式	須玖式
4世紀				4
400 —				5
				5
			第Ⅳ様式	高三瀧式
			第Ⅴ様式	下大隅式
			第Ⅵ様式	西新式
			庄内式	Ia
			布留式	Ib
				IIa
				IIb
				IIIa

天照大神誕生

神武東征

■図表24 登場人物の推定誕生日



伊藤雅文さんへの質問

- 青銅製祭器の発展する時期・場所とは、伊藤さんの東征説は、関わり合いが無さそうですが、
 - 銅鐸・武器型祭器についてのご意見を聞かせて下さい
 - 素戔鳴尊が出雲へ行った時には、青銅製祭器の文化を築いた人達との関係をどう考えていますか
- 戦争遺跡
 - 戦傷遺跡・高地性集落についてのご意見を聞かせて下さい。
- 金印:光武帝に金印を授与された倭奴國王:AD57年 / 倭國王師升:AD107年と、素戔鳴尊/天照大神との関連は？
- 神武東征の出発地を宮崎としていますが、
 - 鉄などの金属器の遺物が、弥生時代の宮崎から出ないことを、どう説明しますか？
 - 景行天皇・ヤマトタケルが熊襲征伐に行きますが、
 - 神武東征の出発地点への軍隊の派遣は異様に思えますが、如何でしょうか？
 - 神武東征後50年程で、派遣することは、不可思議ですが？
 - 301年初代天皇即位→347年(景行12年) {伊藤雅文・年表による}

飯田 眞理説の理解

- 天孫族は、銅鐸祭祈圏の盟主である大国主の出雲の国を屈服させなければならなかった。
- 大国主の国譲り後に、天孫降臨は2回あった。天忍穗耳命の長男・次男が降臨。
 - ①長男:饒速日命が近畿地方へ天下る。 ②次男:二二ギ命が日向へ
- 饒速日命は、五伴緒(五部・二十五部)を連れ、平和的に大和へ降臨。
 - しかし、子孫を残せなかった。(宇摩志麻治命は、本当の子ではない。) 老齡の為か、死亡。
 - 天孫族の直系の子が、失われたことで、九州より、二二ギ命の子孫を招聘。これが神武。
 - 饒速日命側からの招聘で、大和を受け継いだことを隠すため、
 - 壮大な神武東征の、有りもしない苦労話(熊野から宇陀・大和へ)を創りあげた。
 - 神武の出発点は、糸島説も、宮崎説もあり得る。
 - 神武に同行したのは、道臣命(大伴氏の祖)と祖大久米命(久米直の祖)だけ。
 - 五伴緒は登場しない。わずかな同伴者だけで、東遷した。
- 天照大御神＝卑弥呼で、糸島市の平原王墓に埋葬。埋葬年代は三世紀半ば。
- 神武東遷の時期は、卑弥呼・トヨから 2～3 世代後で、4世紀中。
- 神武は二二ギ命の子。天照大御神→天忍穗耳命→二二ギ命→神武
- 神武天皇＝崇神天皇

飯田 眞理さんへの質問

- ・ 饒速日命は、五伴緒を連れ、平和的に大和へ降臨。
 - ・ 井原ヤリミゾ遺跡も那珂・比恵遺跡 須玖遺跡も弥生後期まで大発展する。
 - ・ 平塚川添遺跡も含め、東側の小田・平塚遺跡は、密度濃く生活し、恐ろしい数の集落であったが、古墳時代初頭で突然消えてしまう。
 - ・ 倭人のクニグニも、統合へと向かったと考えられるのである。
- ・ 多数の人々が、平和裏に畿内・大和へ移住できたのならば、
 - ・ 北九州の優れた技術・文化が大和へ移ったはずと想像するが、考古学者は、移った証拠が無いと言う。
 - ・ 鉄製品の出土は、相変わらず、畿内は少ない。
 - ・ 平原遺跡の巨大な「八咫鏡」5面と同じ大きさの鏡は、大和では、長いこと作れなかった。
 - ・ 北九州の土器も、大和で、大量に出土するはずが、出土しない。

考古学的な疑念へコメント下さい。

- ・ 東征のリーダーの五瀬命が、矢傷を受けただけで死んでしまうのは不可解である。
 - ・ 縄文人の使う鏃には、毒が塗られていた。かすり傷でも、矢を受けた動物は、何日か後には、体が弱り、死ぬという。
 - ・ 縄文系の射手が、長脛彦の軍に混じっていたら、単なる矢傷と思った五瀬も毒が回り、死ぬことは、十分あり得るはず。 **いかがでしょうか？**
 - ・ 長脛彦を祀る神社に、石切神社がある。イシキリは脛が長い意味で、縄文系の単語とのこと。上記は有り得ると見る。
- ・ 饒速日命の子には、宇摩志麻治命と天香語山命が居る。
 - ・ 宇摩志麻治命は、長脛彦の姉妹との子
 - ・ 天香語山命は、大国主の娘の天道日命の子 天道日命は、事代主の姉妹。
- ・ 両者の子孫はとも、大和朝廷の最高執政官を輩出するほど、家系として認められている。宇摩志麻治命が本当の子でないとしても、天香語山命は認められた筈。
- ・ **饒速日命の後継者として、神武が招聘されたとの説は、無理な設定と思われるが、如何でしょうか？**

飯田 眞理さんへのコメント

➤ 飯田さんのレジメには、次のようにあるが、疑問がある。

(2)天皇家の先祖のの地(高天原)は北部九州

②二つ目は中国の史書・『新唐書』である。

「・・・其王姓阿每氏、自言初主號天御中主至彦瀲凡三十二世皆以尊為號、居筑紫城、彦瀲子神武立更以天皇為號徙治大和州」

★おそらく**日本の使者が日本書紀の内容を解説したものであろう**。「天皇家の先祖の三十二世は筑紫＝北部九州に居住していた」と記しているのである。

➤ 「天御中主」は、日本書紀の本文には現れない。

- ・ 1段の一書・第4に「天御中主」が現れるが、初代ではない。
 - ・ 初代は国常立、次が、国狭槌、その次に「天御中主」
- ・ 古事記では、「天御中主」が初代。

✓ 従って、新唐書の文章は、日本書紀の内容を解説したものではなく、古事記の内容を説明した結果と思われる。

天地開闢

古事記	日本書紀	日本書紀①	日本書紀②	日本書紀③	日本書紀④	日本書紀⑤	日本書紀⑥
天之御中主	国常立 くにのとこたち	国常立くにのとこたち 国底立くにのそこたち	可美葦牙彦舅 うましあしかびひこじ	可美葦牙彦舅 うましあしかびひこじ	国常立 くにのとこたち	国常立 くにのとこたち	天常立 あめのとこたち
高御産巢日	国狭槌 くにのさつち	国狭槌くにさつち 国狭立くにのさたち	国常立 くにのとこたち	国底立 くにのそこたち	国狭槌 くにのさつち		可美葦牙彦舅 うましあしかびひこじ
神産巢日	豊斟渟 とよくむめ	豊国主とよくにぬし 豊組野とよくむの 豊香節野とよかぶの 浮経野豊買 うかぶののとよかう 豊国野とよくにの 豊齧野とよかぶの 葉木国野はこくにの 見野みの	国狭槌 くにさつち		天御中主		国常立
宇摩志阿斯訶備比古遲 うましあしかびひこじ					高御産巢日 たかみむすひ		
天之常立 あめのとこたち					神皇産靈 かみむすび		
国之常立 くにのとこたち							
豊雲野 とよくもの		日本書紀の番号は異伝（一書曰）の号数					
宇比地邇 うひでに	須比智邇 すひちに	泥土煮 ういじに	沙土煮尊 すいじに	天鏡 あまのかがみ			
角杵 つのぐひ	活杵 いくぐひ	大戸之道 おおとのじ	大苦辺尊 おおとまへ	天万 あまのよろず			
意富斗能地 おほぼくのち	大斗乃辨 おほぼくのべ	面足 おもだる	惶根 かしこね	沫蕩 あわなぎ			
於母蛇流 おもだる	阿夜詞志古泥 あやかしこね	伊弉諾	伊弉冉	伊弉諾			
伊邪那岐	伊邪那美						

国譲りから神武東征についての疑問

- 東征が有った場合の、疑問点
 - 東征の目的は？
 - 何故、九州から大和なのか？
 - いつ行われたのか？
 - 九州の何処からスタートしたのか？
 - 参加人員はどの位多いのか？
 - 成功したのか？ 失敗したのか？
 - 時代背景は？
 - 考古学
 - 銅剣文化圏・銅鐸文化の戦い → 本当？
 - 鏡の文化が九州から近畿へ ならば、九州の大型青銅鏡の技術は何故大和にないのか？
 - 三種の神器は九州から出土する → 東征の根拠になる？
 - 三世紀後半から四世紀初頭にかけての期間にあっては、北九州の勢力が畿内を征服した徴証は、現段階では考古学的にみて何らないという主張も強くなされている。
 - 上記の疑問にしっかり答えた神武東征論が欲しい処。
 - 中々、納得の行く神武東征論には、行き当たらない。
- 東征の目的 → 国譲りで取得した広大な地域を支配するため
 - 何故、九州から大和なのか？ → 支配拠点は中心地が最適
 - いつ行われたのか？ → 東征開始は、西暦232年頃
 - 九州の何処からスタートしたのか？ → 宮崎ではなく、糸島・前原
 - 参加人員はどの位多いのか？ → スタート直後は数万の大軍
熊野から大和侵攻時は、数百人
 - 成功したのか？ 失敗したのか？ → 成功と云えるが、
実質は、九州から、吉備などから参加した数万の人員・軍備・船舶・装備・技術などの全てを熊野灘に失い、絶望的なほどの人的・技術的・文化的損失を出した。
残された遺族の悲嘆も考えると、日本民族にとって、最大の犠牲と損失を出した失敗であった。
 - 時代背景は？ → 倭国乱：出雲族との激闘・国譲りの直後
 - 銅剣文化圏・銅鐸文化の戦い？ → 共に出雲族のもの。違う。
 - 鏡の文化が九州から近畿へ ならば、九州の大型青銅鏡の技術は何故大和にないのか？ → 九州の高度な技術・文明の担い手が、全て、熊野灘で失われ、大和には移らなかった。
 - 三種の神器は九州から出土する → 東征の根拠である。
 - 神武東征の考古学的証拠 → 日本全国にある。
証拠の解釈の仕方により、有る証拠も証拠に見えないだけ。
- この神武東征論に、納得してもらえたら幸いです。